

# 古見古窯跡群

—浜名湖西岸土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—

## ◆出土遺物

2年に及ぶ調査の結果、コンテナ約170箱もの量の遺物が出土しました。これらの出土遺物のうち、中世の遺物は古見第39地点から出土した6箱分のみであり、残りはすべて須恵器です。これらの出土遺物のほとんどが「灰原(はいばら)」と呼ばれる、窯から排出された灰や失敗品を廃棄した場所から見つかりました。そのため、窯跡から見つかる遺物の多くが、形がひずんでしまったり、他の土器と融着してしまったり、割れたりしてしまった失敗品です。しかし、当時の人たちにとっては失敗品でも、現代人である私たちにとっては、多くの情報を与えてくれる貴重な遺物であることには変わりありません。

今回の調査では7世紀前半から中頃、そして8世紀前半から中頃の須恵器が見つかりました。これらの出土遺物への検討を行うことで、湖西窯跡群の須恵器の変遷について、より詳細に知ることが可能となります。



斜面に広がる灰原(古見第36地点)

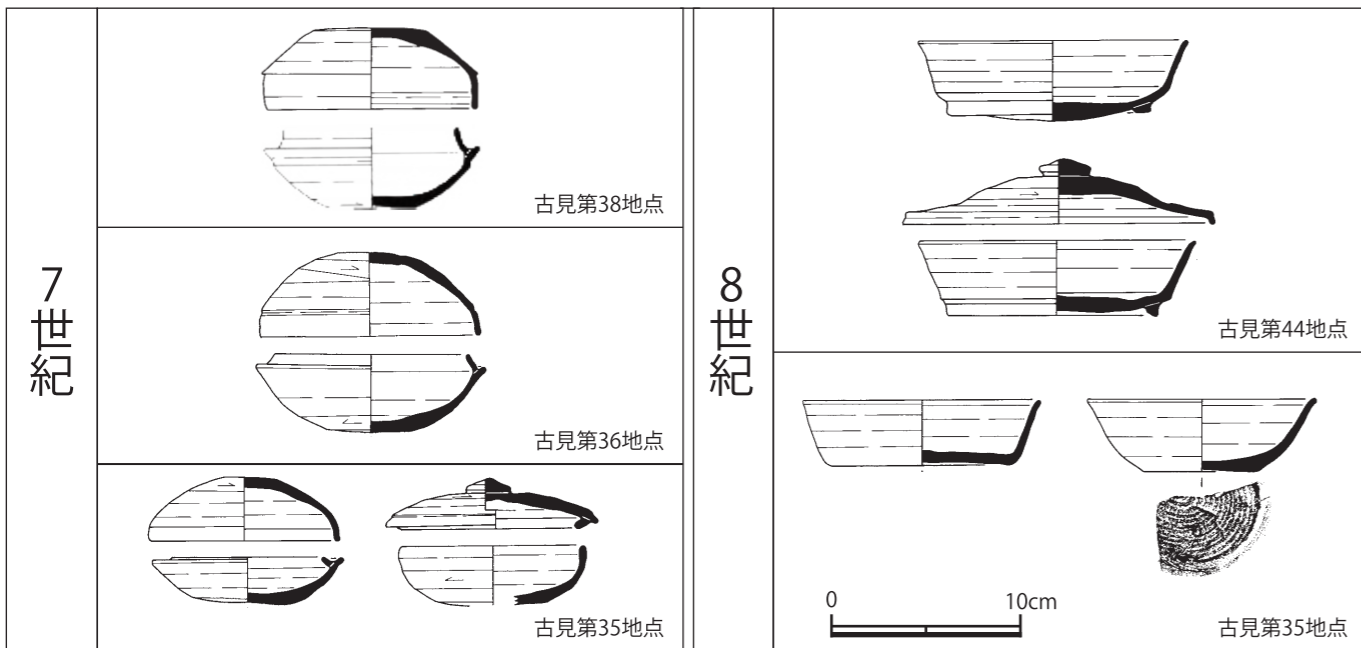
須恵器は最大1200度もの高温で長時間にわたり焼き上げを行うため、大量の灰が生じます。これらの灰は失敗品と共に窯下部の斜面に廃棄されるため、灰原内からは大量の遺物が出土します。



古見第36地点出土須恵器



融着した山茶碗(古見第39地点出土)



古見古窯跡群出土蓋坏

蓋坏(ふたつき)とは、古墳時代から平安時代にかけて用いられた食事用の器です。須恵器の中では最も一般的な器種であり、窯跡からも多く出土します。坏は時代の移り変わりとともに形や大きさを頻繁に変えるため、遺跡の時代を知るための物差しとして利用されます。

問い合わせ先 湖西市産業部文化観光課  
〒431-0492  
湖西市吉美3268番地  
053-576-1140



写真：古見第35地点2号窯

2022. 3

浜名湖西岸土地区画整理組合

## ◆湖西窯跡群とは

湖西市から豊橋市東部にかけての丘陵部には、古墳時代(5世紀末)から鎌倉時代の終わりごろ(14世紀前半)にかけての窯跡が非常に多く分布しており、これらは「湖西窯跡群(こさいかまあとぐん)」と呼ばれています。

湖西窯跡群の生産は飛鳥時代(7世紀前半)から奈良時代(8世紀前半)にかけての時期が特に盛んでした。この時期に作られた「須恵器(すえき)」と呼ばれる焼き物は、静岡県をはじめ、東日本の太平洋沿岸の各地に広がり、最北端は青森県八戸市まで流通していたことが分かっています。

その後、平安時代になると窯の中心は豊橋市の二川周辺に移るものの、平安時代の終わりごろ(12世紀前半)には再び湖西で操業が開始されました。この時期には「山茶碗(やまちゃわん)」と呼ばれる中世陶器を生産していました。鎌倉時代(13世紀)には、同じ東海の巨大窯業地である、古瀬戸窯や常滑窯と競合しながらも規模を拡大させていきますが、鎌倉時代の終わりごろ(14世紀初頭)には廃絶してしまい、その後大規模な窯業生産が行われることはありませんでした。

約800年の間に築かれた窯の数は市内だけでも200箇所近くに上り、1箇所に2~4基、多い場合は10基近くの窯があるため、合計1000基近い数が存在していると考えられています。

## ◆須恵器と山茶碗

須恵器とは5世紀初頭頃に朝鮮半島から伝わってきた焼き物です。窯を使って高温で焼き上げるのが特徴で、5世紀の終わりごろには湖西窯跡群で生産されるようになりました。須恵器は焼き上げる際に、一度高温の状態を窯をふさいで蒸し焼きの状態にします。これにより外からの酸素の供給が減るため、灰色の還元色に仕上がります。

一方、山茶碗とは12~15世紀にかけて東海地方で生産されていた中世陶器のことです。湖西では碗、皿、甕などの日常雑器の他、京都仁和寺円堂院の瓦など、少量の特注品も生産していました。



古墳時代の湖西窯産須恵器



古見第36地点 1号窯



平安時代末~鎌倉時代の湖西産中世陶器



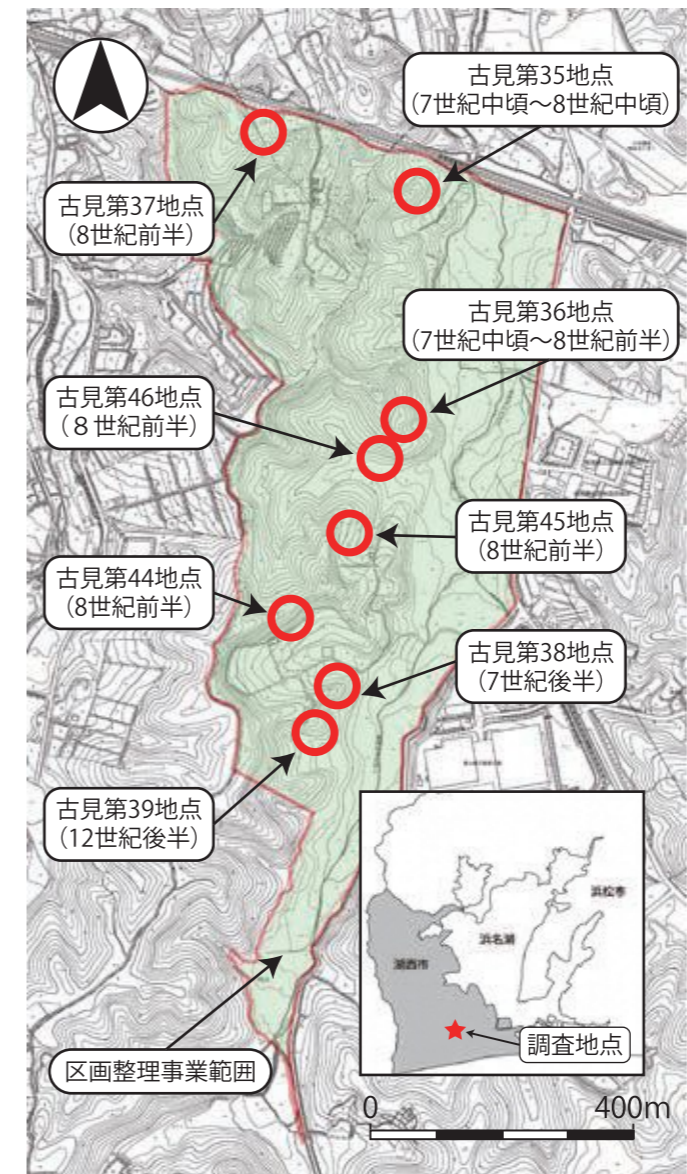
奈良時代の湖西窯産須恵器

## ◆古見古窯跡群の調査成果

浜名湖西岸土地区画整理事業は、約50haに及ぶ大規模な工場用地の造成工事で、古見地区南部で実施されています。この工事を契機として湖西窯跡群の支群である「古見古窯跡群」の調査が始まりました。調査は令和元年度から令和2年度にかけて行われ、8地点から合計17基もの窯跡が見つかりました。

今回の調査で特筆すべき点として、天井を残した状態の窯跡が計4基発見されたことが挙げられます。湖西窯跡群で過去に調査された窯跡のうち、天井を残した状態で発見された事例はごく少数に限られ、天井の残存状態の良い窯がこれほど多く発見されることは、これまでほとんどありませんでした。また、第35地点や第46地点では「燃烧部(ねんしょうぶ)」という窯内の燃料を燃やす場所の天井が残存していました。燃烧部の天井は窯から製品を取り出す際に壊されてしまうことが多いと考えられており、今回のように残された状態での発見は非常に珍しい事例であると言えます。

これらの発掘成果を整理することで、これまで詳しくわかっていなかった湖西窯跡群の天井構造についての検討を進めていくことが今後の課題です。



区画整理事業地内の窯跡位置



古見第38地点



古見第44地点



古見第46地点(2号窯)



古見第39地点